

## 第132回 三方限古典塾（'17, 10, 19）

### 呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その5）

- 1 欲を防ぐは、水に逆らうの舟を挽くが如し。纒に力を歇むれば便ち下に流る。善を力むるは、枝なきの樹に縁るが如し。纒に脚を住むれば便ち下に墜つ。ここを以て君子の心は時として敬畏せざるなし。（存心）

（意識） 欲望を押さえるのは、流れに逆らって舟を引くようなものである。少しでも力を抜けば、たちまち押し流されてしまう。善行を積むのは、枝のない樹によじ登るようなものである。少しでも足の動きを止めると、たちまちすべり落ちてしまう。だから君子は、常に気持ちを引き締めて事に対処するのである。

（余説） 日常の仕事にあたるにしても、人格の向上をはかるにしても、このような慎重な対応が望まれます。ほんの僅かな心の油断が、取り返しのつかない事態を招くことがあるのは、歴史や日々のニュースを見ていて感じます。

参考に挙げた「深淵薄氷」という身を慎むことの戒めは、詩経が出典です。論語・泰伯には、孔子の弟子である曾子が死に際に、詩経のこの戒めを弟子たちに述べています。特に、車の運転などの際にはこの言葉を胸に刻んでおき、慎重な上には慎重な安全運転を期したいものです。

（参考）詩経「戦々兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。」

論語・泰伯「曾子、疾有り。門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云う、戦々兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、と。爾今爾後、吾免るることを知るかな。小子。」

- 2 罪を法に得るは、なお逃避すべし。罪を理に得るには、さらに身を存する処なし。ただ我の心は便ち我を放ち過ぎず。この故に君子の理を畏るは、法を畏るよりも甚だし。（存心）

（意識） 法律に触れるような罪を犯しても、まだ逃れる道はある。だが、道理にはずれるような罪を犯したのでは、身の置き所がなくなってしまう。なぜなら自分の心が自分を許してくれないからだ。だから君子は、法律よりもむしろ道理を恐れるのである。

（余説） ともしれば、厚顔無恥な無理がまかり通り、正しい道理が片隅に追いやられがちな昨今です。映画監督の山田洋次さんのエッセイに「何よりも先ず、正しい道理の通る国にしよう。この我らの国を」とありました。本当にその通りです。国をどうこうする力などない私ですから、せめて自分はそうであるように努めたいと思います。

後醍醐天皇を助けて鎌倉幕府を倒し、室町幕府を興す足利尊氏と戦い、湊川で自決した楠木正成の旗印は、「菊水」の絵柄に「非理法権天」だったと伝えられています。

これは近代日本の法概念であり「無理は道理には勝たず、道理は法令には勝たず、法令は権威には勝たず、権威は天道には勝たない」という意味です。正成の旗印はそれが逆転している当時の世相を示しています。明治政府は天を「天は明らかにして私なし」と解釈して天皇制の根拠としました。太平洋戦争末期に「菊水作戦」で特攻出撃する「戦艦大和」のマストには「非理法権天」の旗が掲げてあったそうです。

3 忘<sup>ぼう</sup>はこれ無<sup>やまい</sup>心の病、助長はこれ有<sup>しやうよう</sup>心の病、心は従<sup>しやうよう</sup>容として自在に、有無の間に活<sup>かつぱつ</sup>潑ならんことを要す。(存心)

(意識) 忘れるというのは、心がどこかへ行ってしまふ病気である。これに対し、助長というのは、心を無理にはたらかせている病気である。心というのは、居なくなつてもいけないし、無理にはたらかせすぎてもいけない。いつものんびりと自由にさせておき、しかも、生き生きとさせておく必要がある。

(余説) 助長には、「物事の成長発展のために外から力を添えること」の外に「~~休息~~<sup>急速</sup>に成長させようとして、無理に力を添えかへつてこれを害すること」の意味があり、ここでは後の意味になります。孟子には助長の例として、「むかし宋の国のある百姓が、苗の成長を早めたい一心で、一所懸命に苗を引っぱつた。それを聞いた息子があわてて畑に駆けつけると、苗はみんな枯れていた」という例があります。

無心も不可、有心も不可。これこそ、あれか・これかの執着を脱して、自由自在な「慎んで二見に住すること勿れ」「不二の体得」です。絶対から相対へ、さらに相即・止揚への戒めではないでしょうか。

(参考) 孟子「天下の苗を助けて長ぜしめざる者は寡<sup>すく</sup>なし。以て益無しと為してこれを舎<sup>す</sup>つる者は、苗を耨<sup>くさぎ</sup>らざる者なり。これを助けて長ぜしむ者は、苗を掘<sup>ぬ</sup>く者なり。徒<sup>ただ</sup>に益無きのみならず、而してこれを害なう。」

4 意<sup>いねん</sup>念<sup>と</sup>を把<sup>と</sup>りて沈<sup>ちん</sup>潜<sup>せん</sup>し得て下さば、何の理か得べからざらん。志<sup>と</sup>氣<sup>と</sup>を把<sup>と</sup>りて奮<sup>ふん</sup>發<sup>ぱつ</sup>し得て起さば、何の事か做<sup>な</sup>すべからざらん。今の学<sup>こ</sup>ぶ者<sup>ふ</sup>は、箇<sup>こ</sup>の浮<sup>ふ</sup>躁<sup>そう</sup>の心<sup>こゝろ</sup>を將<sup>も</sup>つて理<sup>り</sup>を觀<sup>み</sup>、箇<sup>こ</sup>の萎<sup>い</sup>靡<sup>び</sup>の心<sup>こゝろ</sup>を將<sup>も</sup>つて事<sup>こと</sup>に臨<sup>お</sup>み、ただ模<sup>も</sup>糊<sup>こ</sup>として一<sup>いっ</sup>生<sup>せい</sup>を過<sup>お</sup>ごし了<sup>ら</sup>す。(存心)

(意識) 心を静かに深く安定させることができれば、どんな道理でも得られる。またやる気を奮い起こすことができれば、どんな事でも成し遂げられる。

だが、今の人間は、浮ついた心で道理に接し、なえしおれたような弱りきつた心で物事に臨んでいる。これでは何等なすところなく、ぼんやりと一生を終わってしまう。

(余説) ここでは、学問をする者に対する批判と戒めですが、学問のみでなく、芸術やスポーツ、仕事などの現代の多くの生き方に通じることだと思います。

現代の国家も国民もあまりに、これとは相反するような様相がたびたび見えますが、できることなら、己の一生は後悔することが少なくて終えたいものです。

同じ「存心」に、徳に進むにはその大きな妨げとなる「躁<sup>そう</sup>心<sup>しん</sup>・浮<sup>ふ</sup>氣<sup>き</sup>・淺<sup>せん</sup>衷<sup>ちゆう</sup>・狭<sup>きやう</sup>量<sup>りやう</sup>」の八字を去ることが必要だとあります。躁心は、がさがさと落ち着かない心、浮気は浮ついた気持ち、浅衷は浅はかな心、狭量は度量が狭いことです。

そして、この八字に陥らない要としては「ただ静を主とするにあり。ただ静にし<sup>お</sup>れば、千<sup>せん</sup>酬<sup>しゆう</sup>万<sup>まん</sup>応<sup>おう</sup>、すべて道理の上に、事<sup>じ</sup>事<sup>じ</sup>錯<sup>あや</sup>らず」です。

第130回(8月17日)に考えた「沈<sup>しん</sup>静<sup>じやう</sup>なるは最<sup>も</sup>もこれ美<sup>び</sup>質<sup>しつ</sup>なり」「沈<sup>しん</sup>静<sup>じやう</sup>は緘<sup>かん</sup>黙<sup>もく</sup>の謂<sup>い</sup>に非<sup>あら</sup>ざるなり」「真<sup>ま</sup>の沈<sup>しん</sup>静<sup>じやう</sup>なる底<sup>も</sup>は、自<sup>みづ</sup>ずから惺<sup>せい</sup>々<sup>せい</sup>にして一段全幅の精神を包みて裏に在るなり」の沈静と共通するものがありそうです。